

沓掛の宿…中世から古代へ

1 古代東海道の駅

10世紀の『延喜式』の中には、当時の街道の「駅」の一覧が出ています。第28条の諸国駅伝馬条には、全国五畿七道の駅名と備えるべき駅馬、伝馬の数が記載されており、尾張国は、「馬津、新溝、両村 各10疋」となっています。

この古代東海道の尾張の3つの駅は、その位置をめぐってさまざまな議論があります(図1)。が、その中でおおよその位置が絞られているのは3番目の両村になります。これは、中世の二村山やその南の八橋との関連もあってか、豊明市内、江戸時代に沓掛村と呼

ばれた地域にあったとされているのです。

名古屋の鎌倉街道を探す旅は、西北の萱津を出て、古渡、鳴海を経て東南の二村山に上りました。そして最後に目指すのは、この古代の駅だったとされる、沓掛の地になります。

2 両村から二村山へ

(1) 山田郡

両村駅の位置を巡る議論の中に出てくるのが「山田郡」です。山田郡とは名古屋の北から東、南と取り囲むように、古代から中世の終わり頃まで存在した郡です。ところがその後、戦国時代になって廃郡になり、愛智郡と春日部郡に分割されたのです。

この区域が問題となってくるのは、11世紀の『和名抄』に、山田郡に「両村(フタムラ)」という郷が記載されており、両村駅は山田郡にあったという考えがあるからです。

ところが山田郡の範囲については諸説あって定まりません。とくにその範囲の南側を天白川付近とするか、境川付近とするかということが両村駅の位置決定には大きな問題になります。



図1 古代の東海道と名古屋付近の駅『図説愛知県の歴史』より

## (2) 両村と二村

両村の位置を、沓掛村の付近とするのは、中世の二村山との関係が大きいと考えられます。『更級日記』のように、11世紀に「ふたむらの山」とあって、古代から中世への連続性が考えられるからです。古代に「両村」と呼ばれていた地域の丘陵が「ふたむらの山」になり、「二村山」になったというのが今日の通説になったと考えられます。

## (3) 沓掛と宿

沓掛というのは、一般には街道の峠の上り口で道中の安全を願って沓を掛けた所といいます。ここの沓掛は、古く在原の業平が沓を掛けてある風情を面白く思って沓掛といったことから村名になったといわれます。室町時代には郷の名になっており、中世の間に両村から沓掛に変わったようです。

この沓掛には「宿」という字が今もって残ります。中世の『実暁記』等に紹介される、京・鎌倉63宿の中の、

鳴海—50丁—沓掛—50丁—八橋

とある、沓掛とされる所はこの沓掛村字「宿」が符号することになります。

## (4) 鎌倉街道のルート

二村山の峠からは、街道は東に向かいます。

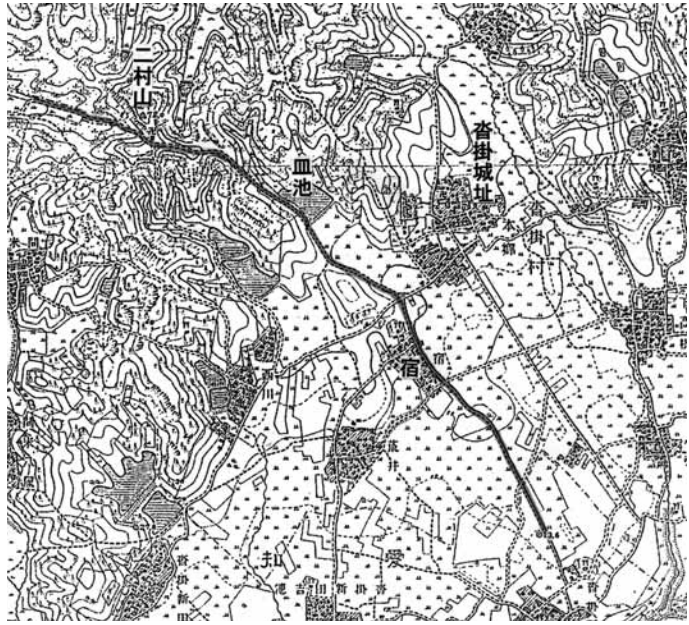


図3 二村山から宿をこえて(明治中頃)

血池の横を通り、緩やかに東南に向きを変えて十王堂を過ぎます。山を下って宿の集落に出ると、そこからは江戸時代の『尾張名所図会』が描くように、平坦な道を、青木地藏、十三塚通って境川に向かいます。(図2、3)

## 3 鎌倉街道をさがす

それでは、二村山の峠から沓掛に向けて歩いてみましょう。二村の峠には、前回通ったルートで保健衛生大学のバス停から東に15分くらいになります。

さて、峠からの道は車道になっており、それを伝うと、少し行った小峠と呼ばれる所から下りになり住宅街に突き当たります。左に迂回して少し下るとバス通りで、右に行くこと

図2 南側から見た二村山(尾張名所図会)



二村山の峠。  
この向こうに山頂への道がある



皿池。この付近に駅家があった？



Y字路左に残った旧道。街道跡？



沓掛城址。堀も再現され、公園になっている皿池の交差点があります。峠からの街道はこの付近を通過して東南に進んだようです。皿池の上辺りは古くはマヤド(馬宿?)という地名だったことから、この辺りが駅家では…という説もあります(文献②)。左に皿池を見てバス道の先を下ると若宮の交差点に出ます。

ここから少し寄り道になりますが沓掛城址に寄って見ましょう。交差点の次の道を左に入ると、道なりに進んで600mほどで沓掛城の跡に出ます。この城は桶狭間の戦いのとき、戦いの前日に今川義元が泊まったことで有名になりました。発掘され、今は堀などが復元



川島天神だった鹿島神社。  
手前に業平の「あひ見ては…」の碑がある

された公園として整備されています。付近の寺社を回りつつ街道に戻ります。

若宮の交差点から西南の地域は十王堂という字で鎌倉期にはお堂があったようですが、江戸時代には名のみになりました。街道はその一部で右の山側を通過していたといいますが、これも今では竹やぶの中です。

沓掛の交差点からは、街道は南の旧道に入ります。入るとすぐ右に鹿島神社があります。この社は、昔は川島天神という式内社で、「かわしま」の「わ」が取れて鹿島神社になったといわれます。ここには沓掛の命名のときに触れた在原業平の歌があり、

あひ見ては心ひとつをかわしまの

水の流れて絶えじとぞ思ふ 業平  
と、川島(川の中の島)を詠みました。この歌は伊勢物語の22段で物語の一部を構成していますが、地元では、この女を愛し、離別に際して詠んだ歌とされています。

街道は旧道を進み、Y字路を左にとります。消防署に突き当たりますが左に迂回して、幹線道路の信号を渡ります。すぐ左に大きな楠木があり、その元に地藏仏がまつられています。これは青木地藏とされるものですが、元の



青木地藏の楠



道は境川へ

地蔵仏は移転され代替仏がまつられています。ここから先は、境川に向けて田の中を1本の道が延びています。その先は三河の八橋になります。

#### 4 発見された駅家跡

昭和37年、沓掛の交差点から1.5\*ほど東の、沓掛村字上高根の行者堂の敷地内から軒丸瓦の破片が採集されました。そしてその後の調査で、古代の駅家の跡と推定されるようになりました(文献③)。

その根拠はいくつかありますが、およそ次のようになります。

- ①瓦の形式は平城京のものに近似する
- ②近国に例がなく、山陽道の駅家で使われる
- ③付近に古代寺院の伝承なく、規模も小さい



古代駅家跡と推定された行者堂。  
せまい路の集落の中にひっそりと



図4 推定された古代東海道ルート。下から高根→白土→平針と

- ④境川から上がった段丘の先の好立地にある
  - ⑤おおよその古代道路の経路上にある 等
- そして古代東海道のルートを境川付近から、中世の鎌倉街道ルートからやや東に振って、「高根—白土—平針」というルートを提案しています(図4)。この論からいけば、街道は10世紀頃から徐々に西側の二村山越えに替わっていったということになるのでしょうか。

鎌倉街道は、当然、前身の古代東海道を変更しながら歩かれてきました。この連載で取り上げた名古屋付近でも、いくつもの古代道路の影に出会いました。そして御器所付近で消えた古代道路跡はもっと東の山側を進んでいたと考えれば、平針経由の道は納得できます。また、江戸時代の東海道はさらに西に移っていったというのも自然な流れのようです。

街道は、少しずつ変わりながら、しかし連続しています。古代から現代までの5本の東海道は、時代とともに状況に合わせて変化してきたのでしょうか。

この次は一何年後か分かりませんが一是非、「古代東海道に挑戦してみたい」と思った、今回のなごや鎌倉街道探索の旅でした。

(完)

〈主な参考文献〉

- ①三渡俊一郎  
「二村山と両村駅について」  
(1987、郷土文化42-1)
- ②武田勇  
『三河古道と鎌倉街道』  
(1976、自費)
- ③梶山勝  
「古代東海道と両村駅」  
(2000、名古屋市博物館紀要23)

### 連載を終えて

400年以上前の、幻のような古道を追う旅は、名古屋を西北から東南に真二つに割るように横断しました。探していけば、そこに先人の足跡がありました。それを足がかりになんとか街道の姿を分かりやすく描こうと努めました。未熟な所も多々あると思います。この紀行を参考に現地を歩いていただいて、是非ご意見をお寄せください。 池田 誠一